

京都十景
京都十景
京都十景
京都十景

京鹿子



7月号

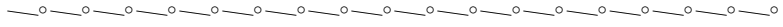
豊田都峰

灌響集 その三十五

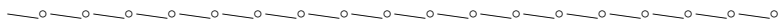
菜の花や野末に雲の席つくる
竹秋や父郷に寄りて晴れ日もらふ
たちまちにおぼれぬ若葉の午後の溪
つばめくる新しき町筋をひきに

京の春・抄

山越えにくる春はまづ川ほとり



軒端なる梅のひなたの石手水
川すぢの青柳のすく芝居の灯
嵯峨野路の寺より届く花だより
ひともとの花くぐりきて禪の門
山城と名付けてよりの春がすみ
四神図の宮処の花は雲がかり
石仏は畦草萌の陽だまりに
風化仏かしげる方へ青き踏む



— 近 詠 —

冷やっこ 丸山佳子

星まつり目だたぬほどに粧へり
茄子漬洗へば誕生石ひかる
日曜のこゝろゆるみし冷やっこ
みづみづしをんな晝寝の手を胸に
汗の顔笑へば健齒恍惚と

秀華採集

春うれひ迂闊に積んだ本の嵩

井尻 妙子

「迂闊に積む」に人間心理がうまく把握されている。読んで考え知るほどに悩み苦しむことは十分認識はしているが、その透き間に入り込まれたのがまさしく「迂闊」である。

看取りとは尽しきること春浅し

柴田 朱美

こんなにも囀りだれもゐない椅子

上野 紫泉

前句の手柄は「春浅し」の季語の組合せ。看取りの思いをうまく述べるが、まだ尽し切れない思いが漂うから。後句は人間の不幸を嘆く。自然のぜいたくな贈り物をおおいに受ければよいのに。

鈴鹿 仁

父の日

ばら咲いて明日の約をとりつける

父の日のちちの文机四畳半

父の日や一茶の軸のすずめ二羽

神の山けふは立夏の風となる

堺市にて

鍛冶屋敷錆いろにして梅雨に入る

近 詠

和田 照海

燧灘

燧灘ひかへなだるる杏花村

からももの花真開きに遠汽笛

放し飼ふ鶏の遠出やあんず咲く

花あんず昼餉のこゑの届く間

燧灘に月競り上げて杏花村



円周率の日 北村 香朗
 円周率の日や鉛筆を削ぎながら
 削ぎながら三・一四の日なりけり
 山里の光求めて春の川
 何事もなくて昇りぬ春満月
 レクリエーションールのままに春の暮

双つ蝶 藤岡 紫水
 すかんぼを噛めば昔の山河見ゆ
 戻ればかなしきまでに紅椿
 影持たぬ高さにもつれ双つ蝶
 麗かや赤い首輪の招き猫
 掌の中に掌のぬくみため老いうら

松田 都青
 人よりも淋しき手もて花酒を酌む
 春の水噛んで飲む日の疲労感
 すこしづつみんな似てゐる落し角
 葉や根はこの先を思案中
 追憶ですりへる時間桜咲く

蓮の花 竹貫 示虹
 あめつちの息合ひ開く蓮の花
 をのが道泣き濡れてゆく蟻ひとり
 椰子の繪のシャツふくらますみなみ風
 崑崙の夕虹を戀ふ老鴉
 虹消えし五ツ年前はきのふなる

三月 丹生をだまき
 視界一転灰色となり小雪散る
 三月や花屋をはみ出す色・色・色
 フリージアいつも優しい声のひと
 杉の花余呉へ下りの径けはし
 杉の花触れれば花粉朦朧と

宇治植物園 丹生をだまき
 仰ぎ行くいろはかえでの若葉道
 万緑に坐せば水音滔々と
 レースカーテン張りし如くに人工滝
 お手毬花の落花の雪を手にとる
 火炎木の花の終りを見てしまふ



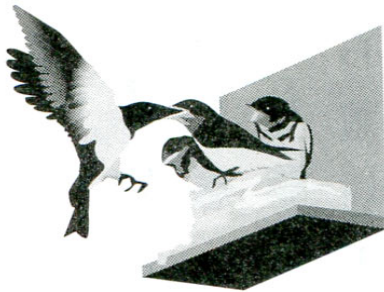
葉 桜
 葉 桜 や 湖 北 に 隠 れ 観 柴 田 朱 美
 葉 桜 や 木 椅 子 ひ と つ の 駐 在 所
 葉 桜 と な つ て 言 葉 を 濁 す の み
 葉 桜 や 余 生 は 歩 幅 ゆ つ くり と
 葉 桜 や 古 塔 に を と こ の 一 挿 話

桜 花 丸 井 巴 水

虚子花洛忌月の雲が嶺にあり
 初ざくら五つ釘の陸奥訛り
 留守勝ちの庵の桜に呼ばれたり
 遠ざかる声に手を振る花吹雪
 花は葉へ三つ違ひのままて来し

京鹿子草 塩 貝 朱 千

著莪あかり人は水音に誘はるる
 石山の石を離れず散ざくら
 吉日や京鹿子草を風筋に
 精いつばい揺れて笑つて花大根
 あとひと粒ビーズ嵌めれば金環食





京鹿子集

豊田都峰選

春うれひ迂闊に積んだ本の嵩

京都 井尻 妙子

白梅に倦怠感を直隠す

返信くるいきさつ包む春埃

さくら待つ金平糖の一角に

再びは逢へぬ人かな雁帰る

春疾風到達点に椅子がない

誕生日桃の写真と子のメール

看取りとは尽しきること春浅し

鎌倉 柴田 朱美

封筒はピンク母から花便り

路の臺いつか主役になりたいと

春夕焼至福の時間リス森へ

眞贋の間はれて芽木のふるへをり

紙の雛飾る臉に緋もうせん

存在の軽さといへど花三分

サボテンは荒野の賢者花盛り

こんなにも囁りだれもみない椅子

習志野 上野 紫泉

芝青む旭に水滴神秘なり

半分は見えぬたんぼぼ地震いくど

木の芽風織りなす緑コーラスに

オハイオ 水谷 直子

アリソナ 伊吹 之博

四月は人の出入りの忙しくて

渋川 東 秋茄子

上京の若者都会は春まぶし

春雷やぷちぷち爪を切る少女
柩よりツタンカーメン囀れる

園芸の店先にはや雪割草

春光をカーブミラーの弾きをり

待ち望みしクリスマスローズ咲きほこり

ロボットの泣いた気の花の闇

梅の香を全身に浴び本殿へ

さいたま 神田 惣介

暖かや切り取り線のやうな雨

夜半の雨薔膨らむ庭の梅

陽炎に覚め陽炎に溶けてゐる

薪能や初夏のひと時夢の中

春風や細身の母のフラフープ

布川 孝子

産声の待たる窓の春の月

うつ伏せのボート押し上げ春の草

四十六億年の地球の齡若菜摘む

千葉 河内 桜人

知らぬ間の隣人の訃や梅二輪

支へあふ白木蓮の揺るぎなし

春泥や無心の姉の手を引きて

浦安 安田 一郎

紅梅や発止と不動明王像

山門の仁王の阿吽はなの雲

父の名は梅次郎供花の梅

対岸の街の灯うるむ春愁ひ

なだれたる残響の谷おとうとよ

春愁や戸板を叩く風の神

伊藤 希眸

日や月や沈丁露地を咲かせゐる

春の雪八百屋までとて油断せり

松戸 児玉 有希

春の雪風評害の石積まれ

出席と返事出せずに春の雪

あいまいな卑弥呼呼杯流しけり

老夫婦歩行天にふゆ桜東風

海老のしつぽ春爛漫の皿の上

街見下ろす北窓ひらき深吸吸

直江 裕子

酒の肴はインカのめざめ春の宵

本堂に弥生やはらぐコカリナ奏

岡山 敦子

引き算は苦手桜のまつさかり

紅梅の風は紅色懐石膳

私小説のいまどのあたり亀鳴かす

佐々木紗知

駅中のランチのうどは東京産

かへりくる餅の濡れて草青む

デイサービスバスは幾台梅真白